

依存から自立へ : Sulaにおける「靴」の描写

河野, 世莉奈
九州大学大学院 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/1909531>

出版情報 : 九大英文学. 58, pp.91-106, 2016-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



依存から自立へ—*Sula* における「靴」の描写

河野 世莉奈

1. はじめに

Toni Morrison 作品における登場人物の描写に目を向けたとき、際立っているのは登場人物たちの帽子やイヤリングなどの持ち物や身に纏っているものである。中でも、「靴」は多用されるモチーフであり、登場人物、とくに女性登場人物の特徴を描写する際、Morrison はこのモチーフを効果的に使用している。とりわけ、第2作 *Sula* (1973) において、Peace 家の3代にわたる女性たち (Eva/ Hannah/ Sula) の履く「靴」の描写は色濃くなされている。片足の母 Eva は残ったその足を常に「踝の上まで来る黒い編み上げ靴」で飾り、娘 Hannah は男物の革のスリッパを履き、その娘 Sula はヒールのあるパンプスを履いて村へと戻ってくる。ここで注目すべきなのは、こういった彼女たちの履く「靴」の描写と、Morrison が描き続ける女性登場人物たちの、自由を追求し自立へと葛藤していく姿、男性との関わり合い方、性的な欲望とが、密接に絡んでいることである。その描写からは、彼女たちの、様々な「靴」を履いて自己を表現し、他者を魅了し、自分たちの欲望をそれぞれ満たそうとする姿が浮き彫りとなってくる。彼女たちにとっての「靴」とは、足を飾ることで他者の注意を惹きつけ、性的な欲望を満たすためには履かなければならない道具の一つなのである。つまりこの「靴」で足を飾る彼女たちの姿は、他者からの視線に依存することでしか自己を認められない女性たちの姿だと言えるのだ。なぜなら、彼女たちは他者に頼ることをやめるとき、「裸足」となっている、あるいは「靴」で足を飾ることをやめているからだ。本稿では、

2 章において Peace 家の女性達と性的な欲望との関係を考察し、そして 3 章において、これら「靴」の描写から第 2 作 *Sula* における女性登場人物の依存から自立への葛藤を読み解く。そしてさらに 4 章においては、その次作である *Song of Solomon* (1977) を中心に、Morrison の他作品においても、「靴」が重要な意味を持ち合わせている可能性を指摘する。

現時点では、「靴」という観点から Morrison 作品を論じた批評は少なく、数少ない例を挙げるとすれば、Morrison 作品と Faulkner 作品をこのモチーフから読み解いた Tommie Lee Jackson や、「靴」とアフリカン・アメリカン文学および南部文学を扱った批評家である、Anthony Barthelemy を挙げることができるだろう。また、“Her [Morrison’s] novels also question how the construction of identity is influenced by the types of clothing her characters wear. The central question appears to be whether or not the African-American Characters’ home and clothing should reflect the white culture” (Parvaneh 35) と、Morrison の小説において、登場人物と服のタイプがアイデンティティ構造と深く関わっており、その服などの所有物が白人文化と比較されていると述べた Farid Parvaneh も、「靴」に特化した言及ではないが、登場人物が身につけている物に注目している点では重要であろう。この彼の指摘は、アフリカン・アメリカンの登場人物が、衣服などを、文明化された社会、つまり白人優位の社会において生き抜いていくために身につけなければならなかった、いわば足枷として見なしている、という 1 つの解釈を可能にする。前述したように、Morrison 作品における女性登場人物たちは、「靴」を自己の魅力を高め、他者、とりわけ男性からの注意を惹きつけるための道具として身につけている。しかし「靴」で足を飾ることをやめる場面がそれぞれに見られることによって、足枷としての「靴」、という「靴」が持つ真の意味が明らかとなるのである。

2. Peace 家の女性たちと“manlove”

第 2 作 *Sula* は、そこに住む黒人たちには“Bottom”と呼ばれる、Medallion という村が舞台となっており、1919 年から 1965 年の間の、Peace 家の女性たちを中心とした物語が展開していく。これまでの先行研究では、Morrison 自身が本作品の前書きにおいて、“I wanted to explore the consequences of what that

escape might be, on not only a conventional black society, but on female friendship”

(*Sula* xvii) .と述べていることも影響して、女性主人公 Sula Peace とその友人 Nel Wright の友情関係、黒人コミュニティに焦点を当てた批評が多く見られてきた。しかし、Peace 家の女性たちが履いている「靴」の描写に目を向ければ、彼女たちの性的な欲望と自立への葛藤が浮き彫りとなってくるのである。

この前書きにおいて Morrison が、“Female freedom always means sexual freedom, even when—especially when—it is seen through the prism of economic freedom” (xiii) .とも述べていることは注意すべきである。この Morrison の言葉は、彼女自身が「女性の自由が性的に自由であることと密接な関係にある」と考えており、その自由を求めるアフリカン・アメリカン女性の姿を意識的に作中に描いている、ということを裏付けるものであろう。つまり彼女たちにとって「女性の自由」を獲得するということは、女性が性的に自立し、自分らしく生き抜いていける力を獲得することを意味しているのである。

Peace 家の女性たちと男性との関係が本作品において重要な要素であることは、Eva が彼女の娘たちに託したのが“manlove” (41) であり¹、彼女たちが unmastered women であった一家の中に男性はおらず、また男性がその家を所有しているわけではない(41)—にもかかわらず、“But actually that was not true. The Peace women simply loved maleness” (41) とあることから明らかである。現に、多くの男性たちが常に彼女たちの家を訪れていた。彼女たちは「すべての男性を愛した」(41) 女性たちであった、とまで描写される。次章において詳細に述べるが、これら男性との関わり合いを通して見えてくる彼女たちの性的な欲望に関しては、たとえば Eva は実際の男性との性的な行為は描かれないものの、彼女の周りには常に男性たちが集っており、その状況を楽しんでいる彼女の姿が描きこまれている。その娘 Hannah は Eva よりも男性を

¹ Karen Carmean は、この“manlove”について以下のように述べている。“But ‘manlove’, the privileging of men, binds Eva to the community, cementing her to an unchallenged tradition—unchallenged, that is, until Sula reaches adulthood (153). この指摘は、Eva が社会を生き抜いていくために“manlove”を重要視していたことと、Eva と Sula との共通点が浮き彫りとなっている点で重要であろう。

求める度合いは強い。“Hannah simply refused to live without the attentions of a man” (42) とあるように、彼女は男性からの注目を常に意識し、夫 Rekus の死後であっても、友人の夫や近隣の男を相手に性的な欲望を満たしていく。孫 Sula に至っては母親の要素を存分に引き継いでいる。彼女は Hannah と同様、様々な男たちと関係を持ち、終いには親友である Nel の夫 Jude を寝取る、という行動に出るのである。そして強調しておきたいのは、こういった彼女たちの性的な欲望を考察したときに、彼女たちが履いている「靴」が重要な意味を帯びてくることである。それでは次章において、Peace 家の女性達を「靴」の描写を通して分析していく。

3. Peace 家の女性たちと「靴」の描写

Peace 家の女性たちと性的な欲望が密接な関係にあることは 2 章においてすでに述べた。その欲望は、彼女たちの、「靴」を履いて足を飾る、という行為に投影されているのである。

まず、Eva は、お金を得るために片足を犠牲にしたのだ、とその村では噂されており、息子と娘二人を女手 1 つで育て上げるという、経済的にも、精神的にも比較的自立した女性として作中では描かれている。吉田廂子も述べているように、彼女は一見「男性に服従したり、保護を求めたりする習慣とは無縁な女」(吉田 65) として描きこまれているように思えるだろう。しかしそんな彼女の「靴」の描写に目を向けてみると、以下のことが明らかとなってくる。

Whatever the fate of her lost leg, the remaining one was magnificent. It was stockinged and shod at all times and in all weather. Once in a while she got a felt slipper for Christmas or her birthday, but they soon disappeared, for Eva always wore a black laced-up shoe that came well above her ankle. Nor did she wear overlong dresses to disguise the empty place on her left side. Her dresses were mid-calf so that her one glamorous leg was always in view as well as the long fall of space below her left thigh. (31, emphases are mine)

引用にあるように、彼女は残った片足を常に「踝の上まで来る黒い編み上げ靴」で飾っており、その足は常に男たちを魅了していた。クリスマスの贈り物としてもらったスリッパがすぐになくなってしまふ、ということからは、いかに彼女がその「編み上げ靴」に固執していたかがうかがい知れるであろう。2 章で述べたように、Eva の実際の男性との性的な行為は作中では描かれないが、明らかに男性たちは、“The men wanted to see her lovely calf, that neat shoe, and watch the focusing that sometimes swept down out of the distances in her eyes.” (41) とあるように、彼女の「愛らしいふくらはぎ」と「こぎれいな靴」を見たがっており、一方の Eva も、「靴」で飾った足を男たちに見せることにより満足感を得ていることがこの「靴」の描写から明らかとなってくるのである。

彼女は夫 Boy Boy から棄てられたあと、子供たちを知り合いに預け、18 ヶ月後に片足となり帰ってくる。片足を残したのは、足を飾ることで「共同体の男たちにとって魅力的な女性であり続け」、「自己の存在を確立」(吉田 104) していくためであったのだ²。しかし、彼女は物語の後半において、「靴」を履くことをやめる。孫 Sula に家から老人ホームへと強制的に追い出され、Sula の友人 Nel が彼女を訪れる場面においては、彼女の履く「靴」は前述した「編み上げ靴」ではなく、以前は決して履くことのなかった「スリッパ」へと変化している。

At first she [Nel] couldn't believe it. She [Eva] seemed so small, sitting at that table in a black-vinyl chair. All the heaviness had gone and the height. *Her once beautiful leg had no stocking and the foot was in a slipper.* Nel wanted to cry—not for Eva's milk-dull eyes or her floppy lips, but for the once proud foot accustomed for over a half century to a *fine well-laced shoe*, now stuffed gracelessly into a pink terry cloth

² また、吉田は、この Eva の姿を「当時としてはきわめて斬新な女性像」と述べている。(吉田 104)

slipper. (167, emphases are mine)

Nel は変わり果てた Eva の姿に衝撃を受け、Eva がかつて履いていた「編み上げ靴」ではなく「ピンク色のテリークロス製のスリッパ」を履いている、という事実に泣きたくなった。この描写は、Eva と「靴」のモチーフが密接に関係するものとして本作品に描きこまれていることを裏付けている点で重要である。このときの Eva はもうすでに、Sula と Nel の区別がつかないほどにまで老いてしまっているため、訪れる男性もおらず、足を飾り立てる必要もない、と言うこともできるであろう。しかし以前は決して履くことのなかった「スリッパ」を履く、という行為は、彼女が男性の視線を気にする必要性がなくなった、つまり男性の注意を惹きつけることに依存しなくなっている姿であるのだ。

続いて、Eva の娘 Hannah が履いている「靴」の描写に注目してみたい。

Hannah simply refused to live without the attentions of a man, and after Rekus' [her husband's] death had a steady sequence of lovers, mostly the husbands of her friends and neighbors. Her flirting was sweet, low and guileless. Without ever a pat of the hair, a rush to change clothes or a quick application of paint, with no gesture whatsoever, she rippled with sex. In her same old print wraparound, *barefoot in the summer, in the winter her feet in a man's leather slippers with the backs flattened under her heels*, she made men aware of her behind, her slim ankles, the dew-smooth skin and the incredible length of neck. (42, emphases are mine)

Hannah は夏には「裸足」、冬には男物の革のスリッパを踵の部分を潰して履いており、ほっそりとした足首を見せることで男たちを魅了していた³。

³ 先述した、Morrison 作品と Faulkner 作品を「靴」という観点から読み解いた Tommie Lee Jackson は、「男物の靴は登場人物のセクシュアリティのエッセンスとなっている」と述べた上で、Eva が女物の「踝の上まで来る黒い編み上げ靴」を履き、男たちを魅

“Hannah simply refused to live without the attentions of a man” (42) とあったように、彼女は Eva 以上に男性たちからの視線に依存している。しかし彼女は様々な男性と性的な行為には及ぶものの、彼らと一緒にベッドで眠ることは好まない。彼女は“a daylight lover” (44) でいることに徹していたのである。彼女にとって、誰かと一緒に眠ることは、“a measure of trust and a definite commitment” (44) を意味した。つまり彼女は Eva と同様、男性たちと精神的な絆を築くことは求めていなかったのである。ただ彼女は男性たちを魅了し続ける存在であり続けることにより、自分の存在価値を認めようとする女性であったのだ。そして彼女にとっての「靴」とは、そのほっそりとした足首を際立たせることで、男性の性欲を掻き立てるための道具として重要なものであったのである。

また、Hannah は、男物の「靴」を履き、性的な欲望を満たすことができていたものの、母 Eva との関係に頭を悩ませていた。彼女は、男性からではなく、唯一母親からの精神的な絆を求めると同時に、Eva からの愛情に対して不信感を抱きつづけていたのである。Hannah はあるとき、Eva に“Mamma, did you ever love us?” (67) と問いかける。Eva は初め、答える素振りを見せないが、“No. I don’t reckon I did. Not the way you thinkin” (67) と答え、“You settin’ here with your healthy-ass self and ax me did I love you? Them big old eyes in your head would a been two holes full of maggots if I hadn’t.” (68) と Hannah を罵倒する。もちろん、この Eva のこの言葉は、愛しているという前提のもと、子供たちを育てあげてきた、という自信から発せられた答えであると思われる。しかし、Hannah はそんな Eva の感情を理解することはできず、あきらめて部屋を去ってしまう。この描写は、Hannah が母 Eva への依存を断ち切ろうとする第一歩となる場面として読むことができるだろう。そしてそのことは「靴」の描写によりさらに明らかとなるのである。

Hannah と Eva との会話の場面に続いて、“Hannah went off to the kitchen, her

了していることと、Hannah が男物の靴を履いていることとを比較して、「Hannah Peace はおそらく、彼女の多くの恋人たちのうちの一人が所有していた男物のスリッパを履いていた」、そして、「男物の靴が Hannah のセクシュアリティを軽視させてしまう」可能性を指摘している (Jackson 30-31)。

old man's slippers plopping down the stairs and over the hardwood floors.” (72)とあるように、Hannah は部屋を後にし、台所へと去っていくのだが、彼女の男物のスリッパが階段からすべり落ち、堅い木の床の上に転がりおちてしまう。彼女にとっては、先述した母親からの言葉は、母からの追放、ともとれるものであっただろう。唯一精神的な絆を求めていた母により拒絶された（少なくとも彼女はそう思いこんでいる）ことは、彼女に自己にしか頼ることはできないのだ、と思わせるに至った。そのことを象徴しているように、彼女は「裸足」となる。しかし、彼女はこの後の場面で、不慮の事故で火に包まれて死に至ってしまうのだ。後述するが、ここで自立への可能性を持ち始めた女性が死に至ってしまう点は重要である。

また、この Hannah と Eva の会話の途中や、Hannah の「靴」が取り払われた直後の場面で登場する、Eva が面倒を見ていた Dewey 兄弟が興じている“chain gang”という遊びも、彼女の男物のスリッパが取り払われた意義を強調させるものとなっている。

[Eva] listened to the silence that followed Hannah's words, then said, “Scat!” to the deweys who were playing chain gang near the window. With the shoelaces of each of them tied to the laces of them tied to the laces of the others, they stumbled and fumbled out of Eva's room. (67)

この“chain gang”とは、1つの鎖に繋がれた奴隷、を意味し、この光景は奴隷制下のアメリカ南部社会においてよく見られたものであった。この靴紐で足と足とを結び合わせる行為は、アフリカン・アメリカンにとっての足枷としての「靴」を暗に示したものであり、この Dewey 兄弟の遊びが Hannah の死の前に行われた Eva との会話の中に差し挟まれている、ということは注目すべき点である。

Through the window over the sink she [Hannah] could see the deweys still playing chain gang, their ankles bound one to the other, they tumbled, struggled back to their feet and tried to walk single file. (72)

Hannah は窓越しに Dewey 兄弟がまだ“chain gang”に興じているのを見る。彼らはお互いの足首を一緒に縛っているため、つまりいてしまう——。この場面は、本作品において、「靴」が登場人物にとって足枷としての役割を果たしていることを暗に示している点で重要である。そしてこの描写からも、Hannah の男物のスリッパが脱げるという状況は、足枷としての「靴」を取り払い「裸足」になれた Hannah が自己を確立できる可能性がより一層際立ってくるだろう。

Hannah は、男たちを魅了し、性的に満足することをやめなかった。その上、死の直前、彼女は母 Eva に自分への愛情の確認をするのである。このことは、Morrison が前書きにおいて、「彼女は Eva に依存している、だから彼女は competitive な人間とは言えない」(xiii) と言っていることと関連している。母親に愛されていないと感じていた Hannah は、その空虚さを埋めるかのように、男たちからの愛情を必要としていたのである。Eva と同様誰か他の人に依存することで、生きる価値を見出そうとしていた Hannah は、「靴」を履くことで、その基盤を作っていたのである。先述したように、彼女はその「靴」が取り払われた直後に不慮の事故により死に至ってしまうが、しかしその直前に自己の獲得への第一歩を踏み出していたのである。そしてこの展開は、アフリカン・アメリカン女性の自由の獲得への困難さと呼応していると言っている。4 章で触れるが、この男物の「靴」を履きながら、自立し、自由を追求しようとする女性登場人物は、続く第 3 作 *Song of Solomon* の Pilate を通しても描かれているが、彼女もまた、その試みを成功させることができないまま、死に至らしめられる人物として描かれている。

最後に、Sula の履いている「靴」に注目すると、彼女の性的な欲望も明らかとなってくる。ここで彼女も Hannah と同様、母親からの追放を経験していることを指摘しておきたい。彼女は、12 歳のときに、母 Hannah が“I just don’t like her.” (57) と友人に語っているところを立ち聞きしてしまうのだ。この言葉は、“the pronouncement sent her[Sula] flying up the stairs” (57) とあることから明らかなように、Sula に多大な衝撃を与える。先ほどの Eva からの追放を経験した後の Hannah の姿と呼応するように、彼女も友人 Nel と「裸

足」で遊びまわるのだ。しかし物語の前半部の最後の場面において、Sula はこの村から姿を消す。そして、10 年が経ったところで幕を開ける後半部において、パンプスを履いて町に帰ってくるのである。そこでは、「裸足」で無邪気に遊びまわっていた彼女とは明らかに異なる姿が色濃く描写されている。彼女は、“a movie star”のように着飾り、しかも質のいいものばかりを身に纏っている(90-91)。そして、パンプスを履いた彼女は、Eva や Hannah と同様、座っている男たちの視線を惹きつける(90-91)。その後の Sula の姿は、“the same way her mother, Hannah” (95) と描写されるように、母 Hannah との共通点がとても多く、“Eva’s arrogance and Hannah’s self-indulgence merged in her and, with a twist that was all her own imagination” (118) 、と祖母 Eva のエッセンスも多分に入り混じっている女性として描かれる。実際、Sula の行動は、町でのけ者扱いされるようになるほど異質なものであった。様々な男たちと性的な関係を持ち、親友であるはずの Nel の夫 Jude までも寝取ってしまうのである。前半部では Nel と「裸足」で遊びまわっていた Sula が、後半部においてパンプスを履いて戻ってくる——これはその後の Sula の立ち振る舞い、彼女の性的な欲望がむき出しになっていくことを予兆するものであったとすることができるだろう。

Sula は村に帰ってきたあと、結婚して子供を産め、と言う Eva に対して、“I don’t want to make somebody else. I want to make myself” (92)と言い放ってみせる。しかし、それまで Hannah と同様男性との精神的な絆は求めてこなかった Sula であったが、Ajax という一人の男の前では、彼女が忌み嫌っていた男性のために生きようとする村の女たちに同化してしまい、自己の確立に失敗してしまうのだ。このことが仇となり、Ajax に見棄てられ、彼女は2度目の追放を経験するに至る。そしてその後、彼女のはかつて自分たちが「裸足」で遊びまわっていた時のことを思い出すのである (146)。実際に彼女が「裸足」になった、というわけではないが、彼女が「裸足」であったときのことを思い出している点は注意すべき点であろう。ここでも、性的な欲望を満たすための道具である、足枷としての「靴」を取り払うことが、彼女の自己の確立へと次へ進む第一歩として暗に使用されているのである。彼女はこの経験を経た後で Nel に対して、“my lonely is mine. Now your lonely is somebody

else's. Made by somebody else and handed to you. Ain't that something? A secondhand lonely.” (143) と主張する。これは、他人からの力をもはや必要としなくなった *Sula* の姿勢を浮き彫りにしている。そして彼女の臨終の際の描写は、何もかもが取り払われた、胎児のイメージを持って描かれるのである。

本章では、彼女たちの履いている「靴」が、男たちを魅了するため、そして性的な欲望を満たし、「自己の存在を確立」(吉田 104) するための道具として、効果的に使われていることを示した。しかしその「靴」はときとして足枷、という意味を持ち合わせていた。そのことが裏付けるように、彼女たちは、自己の確立への第一歩を踏み出そうとしているとき、「裸足」になってみせる、あるいは、それまで履いていた「靴」を履くことをやめるのである。

4. 男物の靴を履く女性たち—*Song of Solomon* の Pilate を例に

第3作目である *Song of Solomon* は、Milkman というあだ名で呼ばれる男性を主人公にしたものだが、Morrison 自身が Nellie McKay とのインタビューにおいて“Pilate is a less despotic Eva” (144) と語っているように、彼の叔母である Pilate はこの物語において、強烈な印象を与える。そして、Pilate の描写においても、際立っているのが、「靴」の描写なのである。

She [Pilate] was as tall as his father [Milkman's father], head and shoulders taller than himself. Her dress wasn't as long as he had thought; it came to just below her calf and now he could see *her unlaced men's shoes* and the silvery-brown skin of her ankles. (*Song of Solomon* 38, emphases are mine)

Pilate も、*Sula* の Hannah と同様、男物の「靴」、ここでは、「紐のない男物の靴」を履いている。しかし、彼女は Hannah とは違う側面を持っている。彼女はかつて、“The people in her hometown remember Pilate as a pretty woods-wild girl that couldn't nobody put shoes on” (234)、とあるように、枷としての「靴」を履きたくないという強い意志を持った少女であった。また、“Brogans”とい

うエッセーの中で、Anthony Barthelemy は、“the brogan in the United States also has a distinctly American history because it came to be associated with slavery and later the freedmen who struggled against the indifference and sometimes persecution of their countrymen and their government.” (Barthelemy 180)、と指摘している。つまりその「靴」を履くということを拒絶する Pilate の姿は、枷としての「靴」を履くことに抵抗し、自由を求める強い意志をはっきりと示す少女の姿である。また、彼女は、“She [Pilate] slipped into those *Jemima shoes* cause they fit” (224) .とあるように、「足にフィットする」という理由でその「靴」を選んだ。これは、彼女が「靴」を、他の女性登場人物のように、足を異性に魅せるための道具として使っているわけではない、ということを意味するだろう。実際彼女の男たちとの性的な関係や Eva のように男性を周りに侍らせる様子が作中に描き込まれていないことは、重要である。この点においても、Pilate は他の女性人物とは異なる面を持っているのである。

彼女は、Milkman が初めて会ったとき、紐のない男物の「靴」を履いていた。この、紐なし靴は、3 章において触れた“chain gang”の遊びを踏まえると、縛り、つまり奴隷を繋いでいた“chain”からの解放を表しているものであると言えるだろう。そして、彼女の暮らしぶりにも興味深いものがある。

She had no electricity because she would not pay for the service. Nor for gas. At night she and her daughter [Reba] lit the house with candles and kerosene lamps; they warmed themselves and cooked with wood and coal, pumped kitchen water into a dry sink through a pipeline from a well and lived pretty much as though progress was a word that meant walking a little farther on down the road. (27)

この引用からは、電気料金を支払わずに、自給自足的な生活をしていた Pilate の姿——つまり、彼女は、「靴」を履かない、という少女時代に見られた強い意志と共通する、文明化された社会に影響を与えられない生活をしていた、と言うことができるのではないだろうか。そのような生活をしながら、彼女は Morrison が *Sula* の前書きにおいて述べていた、“female freedom”を獲得し

ようとしていたのである。

またこの、「文明化された社会の影響を拒否」する Pilate の姿勢は、第 5 作 *Beloved* の Baby Suggs の言葉を思い起こさせる。⁴

Here in this here place, we flesh; flesh that weeps, laughs; flesh that dances on *bare feet* in grass. Love it. Love it hard. Yonder they do not love your flesh. They despise it. . . . This is flesh I'm talking about here. Flesh that needs to be loved. *Feet* that need to rest and to dance; backs that need supports; shoulders that need arms, strong arms I'm telling you. (*Beloved* 103-04, emphases are mine)

この Baby Suggs の言葉は、アフリカン・アメリカンとしてどのように生きていくべきか、という一つの教えと言えるだろう。泣いたり、笑ったり、草の上で「裸足」で踊ったりする肉体、自由な肉体を愛さなければならない、と彼女は言うのである。つまり、彼女は文明化された商品の一つである「靴」を履く必要のない、「裸足」で生き抜くことのできる肉体を求めており、白人社会に同化しようとするアフリカン・アメリカンの姿を批判的に見ているといえるのではないだろうか。そして、この言葉には、文明化された社会、つまり白人社会によるアフリカン・アメリカンに対する抑圧という歴史的背景も暗に含まれているのである。

その言葉に沿うように、Pilate は自給自足の生活をし、自分の足を飾る「靴」も履かずに生活していた。白人文明に同化せず、娘と孫娘を養ってきた Pilate は本稿でこれまで述べてきた他の女性登場人物たちと比較するとかなりの度合、自立した女性に思えるだろう。しかし、彼女は、物語のクライマックスの場面において撃たれ、死に至る。彼女は死んだ父親が書いた名前が付いているイヤリングを肌身離さず、ずっと付けていた。このことから、一見自立したように見える彼女も実は父への依存と言う問題を抱えていたのである。

⁴ Farid Parvaneh は、“Baby Suggs and Denver are two examples of characters that are emotionally and literally free beyond the need to consume goods and property” (Parvaneh 37) と述べた上で、この箇所言及している。

クライマックスの場面において、父の骨を埋めたときにそのイヤリングを供える行為は、彼女をずっと拘束していた父からの脱却を表すとも取れるだろう。しかし、彼女はその直後に撃たれて死ぬという結末は、唯一彼女を拘束していたものから解き放たれそうになり、やっと自分らしく生きていける、となったときにその可能性が潰されたということを意味する。その上、Guitar という、男性登場人物に撃たれて死ぬ、ということは、男性にその可能性を潰された、とも解釈することができるだろう。つまり、Pilate の結末における姿も Hannah と同様、アフリカン・アメリカン女性の自由への獲得への困難さを指し示すものであるのだ。

5. まとめ

本稿では、第2作 *Sula* における Peace 家の女性たちを中心に、そして他作品における女性たちの、“female freedom”を獲得しようと奮闘する姿が「靴」というモチーフを使って描きこまれていることを指摘した。本稿で触れた *Sula* と *Song of Solomon* や *Beloved* 以外の他作品においては、例えば *Tar Baby* (1981)においては年老いて「靴」の種類を変える女性、*Jazz* (1992)においてはハイヒールを履いている女性が男たちの心を捉える場面が色濃く描かれているし、*Paradise* (1997)においても、6インチのヒールで他人の目を惹きつける *Grace, Love* (2003) においても、ハイヒールを履いている女性の足に見とれる男性の姿がそれぞれ描きこまれている。そして *A Mercy* に至っては、“The beginning begins with the shoes” (*A Mercy* 4).という言葉から話が展開していくのだ。このように、Morrison 作品における女性登場人物たちと「靴」の描写には密接な関係があるのである。彼女たちにとって「靴」とは、性的な欲望を満たすためには不可欠な道具であった。他人からの追放を経験した後に「裸足」になる彼女たちの姿は、男性にアピールする必要のなくなった、言い換えれば、他人の視線に依存する必要のなくなった、自立への第一歩を踏み出そうとする女性の姿である。

「靴」は、ときに彼女たちに社会で生き抜くための力を与える。しかし、象徴的な意味においては、ときとして足枷としての役割を果たす。Baby Suggs が述べるように、「裸足」であること、が人間のあるがままの姿なのである。

これは決して非文明、という意味ではない。枷にはめられることなく、つまり「黒人社会に浸透する白人文明の影響」(吉田 87)が指し示す社会の枠組みに捉われることなく、自由に振る舞うことができる、ということである。

付け加えておけば、アメリカにおいて初の黒人大統領が誕生した年でもある、2008年に出版された第9作 *A Mercy* の Florens は、「靴」を無性に欲しがり、母からの追放を経て、一人の男性との恋愛を経験した後、強い踵を獲得するに至り、「裸足」で生きていくことを決意する女性である。彼女は Hannah とは違って“competitive person”であり、また Pilate とも違って、「裸足」となり、一人で生き抜く力を身に付けることに成功する女性である。この Florens のように、女性が「自分らしく生き抜く」力、「女性としての真の自由」を獲得するためには、Baby Suggs の言葉、“Here in this here place, we flesh; flesh that weeps, laughs; flesh that dances on bare feet in grass. Love it. Love it hard.”という言葉も示しているように、まずありのままの自分を愛さなければならない、ということをも Morrison は彼女の作品を通して主張しているのではないだろうか。

引用文献

- Barthelemy, Anthony. “Brogans”. *Footnotes: On Shoes*. Ed. Shari Benstock and Suzanne Ferriss. New Jersey: Rutgers UP, 2001. 179-96. Print.
- Carmean, Karen. “Sula.” *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Sula*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. (149-61). Print.
- Jackson, Tommie Lee. “‘High-topped Shoes’: Signifiers of Race, Class, and Gender in Selected Fiction by William Faulkner and Toni Morrison.” *“High-Topped Shoes” and Other Signifiers of Race, Class Gender and Ethnicity in Selected Fiction by William Faulkner and Toni Morrison*. Maryland: UP of America, 2006. 13-36. Print.
- McKay, Nellie. “An Interview with Toni Morrison.” *Conversation with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor- Guthrie. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 138-55. Print.
- Morrison, Toni. *A Mercy*. 2008. New York: Vintage International, 2009. Print.
- . *Beloved*. 1987. New York: Vintage International, 2004. Print.

---. *Song of Solomon*. 1977. New York: Vintage International, 2004. Print.

---. *Sula*. 1973. New York: Vintage International, 2004. Print.

Parvaneh, Farid. "Formation of Identity in Toni Morrison's African-American Fictional Characters." *Studies in Literature and Language* 1.5 (2010): 35-45. Print.

吉田迪子 『トニ＝モリスン』 清水書院、1999 年。